

---

# とある魔術と紅の鎧

ぱっつあん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術と紅の鎧

### 【Nコード】

N0253M

### 【作者名】

ぱつつあん

### 【あらすじ】

紅魅南くれないみなと言う少女は特別な力を持つLEVEL0の高校生だ。この少女が住んでいる学園都市にはファンガイアと生物が存在している。このファンガイアは人の命を食べて生きている生物だ。そしてそんなファンガイアから民間人を守るためにこの少女は戦っている。幻想殺しと魔術師と紅の鎧がまじわるとき幻想の鎖を解き放て。

これは仮面ライダーキバととある魔術の禁書目録のクロスオーバー作品です。この話では矛盾点などがあるかもしれませんが多めに見てください。そして出来ればレビューを書いていただけ

ればうれしいです。

## とある女子生徒（前書き）

これは作者の息抜きに書いた小説です。

いろいろ原作と違うところや矛盾点などがあると思いますが多めに  
見てください。

ではwake up!!

## とある女子生徒

学園都市…

東京西部の未開拓地を一気に切り開いてつくられた文字通り学生の街だ。

大小様々な教育機関に230万人もの住民を抱えているこの都市はかいほう記録術が盛んに行われている。

しかしそんな学園都市にはもう一つの顔がある。

記録術とは学園都市特有の時間割カリキュラムの一つである。

表向きは「記録術」や「案記術」とされているがその実態はは投薬や生体刺激あるいは催眠暗示によって「超能力」開発をするという飛び抜けたものだ。

発現する能力は個人の資質によるところが大きいが一通りの時間割をこなせば大抵の生徒はスプーンの一つくらい曲げられるようになる。

### 一大能力開発機関

それが学園都市のもう一つの顔なのだ。

だがこの学園都市には超能力者だけでなくとある生物も生息しているのだ

くとある魔術と紅の鎧

第一話「とある女子生徒」  
スタート

夜の学園都市に一人の少女の叫びが響き渡った。

少女は今見たことがないような生物に襲われていた。

「キシヤアアアア!!」

その生物は奇妙な叫び声を上げながら追いかけてくる。

少女は助けてと口を動かすが言葉が出ない。

「キシヤアアアア!!」

謎の生物がもう一回叫んだとき少女は息を呑んだ。

これで私の人生は終わりかと今までを振り返るほどだった。

しかしその少女が化け物に襲われることはなかった。

何故ならば紅の鎧をまとった謎の人物が化け物と少女の間に割って

入っていたからだ。

「大丈夫？ 怪我はない？」

紅の鎧をまとった人物の声は大人っぽい透き通ったきれいな女性の声だった。

「だ、大丈夫です…」

「そう。なら早く逃げて。ここは私が引き受けるわ」

「は、はい」

少女は謎の人物に答えると逃げていった。

それを確認した謎の人物は化け物に向き直った。

「貴様はキバの後継者か？」

ファンガイアは謎の人物に話しかけた。

「あらこの鎧のこと知ってるのね？ さすがはファンガイアね」

キバと呼ばれた謎の人物が軽い感じで答えた。

「何故邪魔をする？ 我々は食事をしようとしただけだ」

「うーん…私も人間だから同じ人間が食べられるのは見たくないの」

「なら貴様も死ね！！」

ファンガイアと呼ばれた化け物はキバと呼ばれた謎の人物に突っ込んできた。

「ふう…全く血の氣が多いわね」

そう言ってキバは横にっていたいた笛のようなものを腰のあたりにつけているコウモリのような物の口につけた。

すると…

「wake up!」

コウモリのような物体から声が聞こえた。

すると右足についていた鎖が弾け翼のようなものが出てきた。

キバは飛び上がり空中で一回転した。

「ハアアアアア!」

雄叫びをあげてそのままファンガイアに跳び蹴りを食らわせた。

「グアアアアアア!」

ファンガイアは絶叫をあげて碎け散った。

「これにておしまい」

キバはそれだけを言い残すとその場から姿を消した。



次の日テレビでファンガイアの事が報道されていた。

ファンガイアとは能力者が突然変異した進化型能力者とされている生き物だ。

そんなテレビを見ながらとある少女は歯磨きをしていた。

とある少女とは「紅魅南<sup>くれないみな</sup>」と言う女子生徒だ。

この少女はとある高校に通う女子校生だ。

髪は茶色で長さは背中あたりまでのぼしている。

世間から言えば美少女に分類される少女だ。

「ふぁゝあ眠いなあ…」

そして魅南は能力など使えない無能力者だ。

だがそんな魅南には人には言えない力があつた。

「時間はまだ大丈夫…か。」

まあ暇だし早めに行くか」

魅南は制服を着て家を出た。

しかし隣の部屋から「不幸だぁ！！」という声が聞こえてきたが毎日の事なので気にしないことにした。

「あいかわずね不幸くん…」

そんな事を呟きながら学校に向かった。

向かったはずだったのだが行く途中で複数の男に囲まれてしまった。

「可愛いね君。俺達と遊ばない？」

「学校があるんで遠慮しておきます」

「そんな堅いこと言わないで行こうぜ？」

「そうそう学校なんかさぼればいいじゃん？」

男達は魅南を囲んだままにやにやしながら言ってきた。

「はぁ…あんた達あんまりしつこいと怒るよ？」

「ぷっ！！怒る？お嬢ちゃんが？」

男達は魅南の言葉に笑っていた。

「怒って何する気なんだ？」

「もちろんあんた達をボコボコにします」

魅南の言葉に男達はさらに笑い声をあげた。

「やれるもんならやってみなよ？お嬢ちゃん？」

この言葉が魅南の怒りに触れた。

それと同時に魅南の手が誰かにつかまれた。

「はいはいごめんよく俺の連れがお世話になりました」

そう言ってツンツン頭の少年が男達から魅南を連れ出した。

しかし魅南はそれを振り払った。

「邪魔しないで上条！！」

「おおい！？お前を助けるためにやったのに邪魔とは何だ！？」

「うるさい不幸野郎！！誰も助けてくれなんて頼んでないわ！！」

「ああそうですか！！けどなあ一つ言っておくことがある！！」

「何よ！！」

「これは本当はお前を助けたんじゃないくてこいつらをお前から助け

「たんだよ!!」

そんな感じで二人が言い争っていると男達が叫んだ。

「何いちゃついてやがんだ!!」

「めんどくせえどっちが邪魔したなんてどうでもいいんだよ!!」

「さっさと女だけよこせ!!」

「誰がこんな奴といちゃついてるって?」

魅南は男達に叫んだ。

「うるせえ!!」

そして男達は上条と魅南に襲いかかってきた。

「逃げるぞ魅南」

上条は魅南の手をがっちり掴んで言った。

「は?」

魅南が間拔けな声を出してしまった。

そして上条はそんな魅南を連れて走り出した。

「てめえ待ちやがれ!!」

と言うような男達の声が聞こえていたがだんだんと小さくなっていった。

「はあはあ…あんたいつまで走ってんのよ?」

「はあ…何言ってるんだ!? このままだと遅刻だぞ!」

「えっ!」

魅南は走りながらケータイで時間を確認した。

今の時間は登校完了時刻まであと三分だった。

「はあ不幸よ(だ)…」

二人は同じ言葉をつぶやきながら走りつづけた。

結局ついたが遅刻してしまったため魅南は夏休みの補習が確定してしまった。

そして授業が始まる前の休み時間に魅南は上条を含めたとある三人と話をしていた。

「まったく上やんと魅いやんは朝からラブラブやねえ」

「誰がラブラブだって? 青髪?」

魅南が青髪と呼んだ少年は三バカデルタフォースの一人である。

本名は分かっているため青髪ピウスと呼んでいる。

「魅いやんと上やんのことぜよ?」

この金髪でサングラスをかけた少年は土御門元春。

三バカデルタフォースの一人だ。

個性的な話し方をしている。

「はん。私はこんなバカはお断りよ!!」

「なっ!? バカだと!?」

「そうだバカだ!」

「お前だけには言われたくねえよ!!」

「はあ? 私は勉強は出来るわ!!」

「へへん勉強なんか出来ても俺達と絡んでる時点でバカなんだよ!!」

「なにい? 怒った!!」

魅南はおちゃらけてる上条に首締めをした。

二人は気付いていないが魅南の胸が上条の頭に触れていた。

そんな二人を見たクラスの男子が上条を睨みつけた。

「上やん…死ぬ覚悟は出来てるぜよ？」

「出来てなくても殺すで♪」

土御門と青髪は上条に黒い笑みを見せて言った。

「ちょっ!?! 待てお前ら俺は何もやってないぞ!?!」

上条の一言によりクラスの男子共がキレた。

「殺っちまええ!!!」

「ギャアアアア!?!」

上条は魅南の腕を振り切り走り出した。

その後ろを男子共が黒いオーラをまといながら追いかけていった。

取り残された魅南は啞然としていた。

「一体何なの？」

「あんたも分かってないわね？」

「どう言うこと吹寄？」

魅南が吹寄と呼んだ少女はおでこで巨乳の少女だ。

そして魅南の言葉に吹寄を含めた女子達がため息をついていた。

「?」

魅南が理解できないでいると：

「不幸だあああああああ！！！」

と言う愉快的悲鳴が響いてきた。

そして何だかんだで放課後がやってきた。

「はいみなさん。明日からお楽しみの夏休みなのです」

そういったのはこのクラスの担任の月詠小萌と言う教師だ。

身長は135cmと小学生のような見た目だが酒もタバコもバリバリの大人である。

ちなみに七不思議に含まれている先生である。

「浮かれていかがわしい場所へ行ったりしちゃダメダメですよおーっ」

先生の話も終わりようやく下校の時間になった。

魅南は傷だらけの上条と並んでいた。

「おい上条大丈夫なの？」

「大丈夫に見えるか？」

ぐったりとした様子で上条は魅南に言った。



「大丈夫そうだな？」

「大丈夫じゃねえよ！！」

「叫ぶなバカっ！！」

魅南は上条に叫び返した。

そして二人は小萌先生とすれ違った。

「小萌センセーさよーならー」

「さようなら小萌先生」

二人が小萌先生に挨拶した。

すると上条に思いがけない言葉が帰ってきた。

「紅ちゃん、上条ちゃんまた明日」

小萌先生にっこりと言われて上条は立ち止まってしまった。

「え…？ えええ…！！？ 今なんと！？」

「聞いてなかったんですか？ 明日からの指定者補習？」

「そう言えば言っていましたね。まあ私は朝言われたけど…」

魅南が小萌先生に黒いオーラを出しながら言った。

「このままじゃ留年決定かもですよーっ。特に開発の単位が」

この二人は無能力者のために開発の単位がなかなかとれないのだ。

「「はあゝ…」」

二人はでかいたため息をつきながら下校していた。

「また目隠しポーカーとかスプーン曲げとかやらされるのか…」

「出来るわけないわよね…」

「どーせ俺達は落ちこぼれの無能力者だよ…」

「私をあんたと一緒にしないでちょうだい…」

二人は黒いオーラを出しながら歩いていた。

すると魅南がとあるものを見つけた。

「ねえ？上条」

「ああん？」

「あそこ寄らない？」

魅南が指差した方向にはには夏の新メニューとでかでかと書いてある看板を見つけた。

そして二人はそのファミレスに入っていった。

そして二人は席に座った。

「まっ丸々一学期分のサボりが一週間の補習でチャラになるなら安いもんだよな？」

「まあそれもそうね？あそこあんたの奢りだから？」

「はあ！？ふざけんなただでさえ貧乏なのにそんな貧乏学生からたかる気か！？」

「いいじゃん。それに私財布持ってきてないよ？」

魅南はニヤリとしながら上条に言った。

「お前最初からそのつもりだったのか…」

「ピンポーン大正解！まあいいじゃんせっかくの夏休みなんだからさ？」

「はあ不幸だ…」

「いっつもじゃん」

「うるせえ！！まあせっかくの夏休みだから今回は特別だぜ？」

「やった上条大好き！！」

魅南はそう言って上条に抱きついた。

そして魅南は上条の顔が赤くなっていることに気づいた。

「どうした上条？」

「離れてくれ魅南…あと当たってる…」

「何が？」

魅南は上条から離れながら聞いた。

しかし上条は答えてくれなかった。

そしてようやく注文していたものがきた。

「っしゃー！！せっかくの夏休みだ！！景気づけにブワーツとムダ食いでも！！」

「オーイエス！！」

と二人が盛り上がっていたが近くを通りかかった店員に水をぶっかけられてしまった上条だった。

「スミマセンスミマセン！！」

店員の人は上条に必死に謝った。

「いいんでスなれてますから…」

「相変わらずすごい不幸ね？」

「もうほっといってくれ…」

上条が店員からもらったタオルで頭を拭いていた。

すると近くのテーブルから声が聞こえてきた。

「よォねーちゃん一人いゝ？」

どこかのアホがナンパをしていた。

「あれ常盤台の生徒じゃない？」

魅南に言われて上条が振り返った。

すると上条が立ち上がった。

「もしかして助ける気？」

「当たり前だ」

そう言っ上条は常盤台の生徒のところに行った。

しかしすぐに上条が帰ってきた。

そして魅南の手を掴み走り出した。

「に、逃げるぞ!!?」

「はぁ!? 逃げるなら最初から助けるなバカ!!」

そんなことを言いながら二人は店をあとにして走り出した。

そして二人は全力で逃げて橋のところまで来ていた。

「ちくしょー何やってんだおれは」

「だからやめろって言ったのよ！」

「てえかっとと倒れやがれ！！ってあれ？」

上条は後ろの男達に向かって叫んだ。

しかしすでに男達の姿はどこにもなかった。

「まったく何やってんだか？」

しかしそこにいたのはさっき助けよとしていた常盤台の生徒がいた。

「出たよ…」

「だからやめろって言ったのよ…」

二人は常盤台の生徒を見ながら言った。

「この私から不良を救って善人気取り？」

「「はあ…」」

「何よそのため息は！！」

「まったく学園都市に七人しかないLEVEL5がなんで私達みたいな無能力者にそんなに関わるのかしら？」

「無能力者、ねえ……」

常盤台の生徒は無能力者という言葉を噛み締めながら言った。

だがそのとき魅南の視界にとあるものが入った。

「ごめん上条後は任せた」

「ちょっと待て……!!」

魅南は上条の言葉を見殺して橋をわたりきった。

そしてとあるものが魅南のところに現れた。

「ファンガイアが出たの？キバット」

魅南はコウモリのようなものをキバットと呼んだ。

「ああ早く行くぜ……!!」

そして二人はとある場所に向かっていった。

続く  
⋮



## とある女子生徒（後書き）

感想待ってます♪

あとレビューを書いていただけるとうれしいです!!

## キバの後継者（前書き）

この物語はほとんど原作やアニメのパクリです。

ではwake up!!

## キバの後継者

魅南はキバットからファンガイアが現れたと報告を受けて街を走っていた。

「キバットまだなの!？」

「もうすぐだからもっとキバってくれ!!」

「もう十分キバってるわよ!!」

キバットを怒鳴りつけながら魅南は走った。

そして走っていると所々破壊されているこっぴに魅南は気づいた。

「キバットもう少しでつくみたいね」

「そうだな。だったら早く行こうぜ!!」

「だからこれで全力って言ってるでしょ!!」

「ああもう分かってるけどよお…」

「分かっているなら少し黙って!!」

魅南は怒鳴りつけながら走るのを止めなかった。

そして走っているとツインテールの常盤台の少女がいた。

どうやら風紀委員として避難誘導をしているようだった。

「ここなのキバット？」

「さっきまではここみたいだったが移動したみたいだ」

「なら早めに行くわよ？」

魅南とキバットは風紀委員の少女に見つからないように移動しようとした。

しかし…

「そのあなた何をしているんですの！？」

ジャッジメントの少女に発見されてしまった。

「このあたりでファンガイアが現れましたの。って魅南先輩ではないですか」

「黒子ちゃん！？」

「こんなところで何をしてるんですの？」

「ええっと…あはは」

「誤魔化しても無駄ですよ！！仕事をさぼって何をしてると思いますしたら遊んでたんですの？」

「べ、別にそう言うわけではないのよ？」

「はあ…まったくジャッジメントとしての自覚をしっかりと持ってくださいな」

「面目ありません…」

魅南は風紀委員ジャッジメントに所属しているのだがさばりがちのために年下の黒子にも説教されるほどだった。

黒子とは白井黒子の事で常盤台中学のLEVEL4の空間移動能力テレポーター者だ。

「それより早く避難誘導をしないと」

「もう終わりましたわ。あとは警備員アンチスキルに任せるしかありませんわ」

黒子はそれにと付け足した。

「紅の鎧をまとう者が倒してくれるかもしれませんし」

「そ、そうね。じゃあ私はこれで」

そう言って魅南はファンガイアが行ったと思われる場所に向かうとした。

しかし黒子に腕を掴まれてしまった。

「魅南先輩も早くわたくしと一緒に避難しますわよ？」

「わ、私はちょっと用事が…」

「つべこべ言わずに一緒に来るんですの」

魅南は黒子に引っ張られ思うように進めなくなっていた。

「黒子ちゃん一人でも大丈夫よ？だから離して？」

「だめですわ。魅南先輩は嘘つきですから」

「うっ…」

「やっぱり。どこに行く気でしたの？」

「そ、それは…」

「まさか…」

黒子がいつにも増して真剣な表情になった。

（もしかしてバレた！？）

魅南がわずかに焦っていた。

「またさぼりですの？」

「ち、違うわよ！！」

「ちょっと動揺してますの」

二人が呑気に話していると後ろの方から爆発が起こった。

「何ですの!?!」

「まさか!?!」

二人がとっさに後ろを振り向いた。

するとそこには蚊のような見た目をしたファンガイアがこっちに歩いてきていた。

「キシヤアアア!?!」

そのファンガイアは威嚇するようにうなっていた。

「黒子ちゃんあなたは…」

「魅南先輩は下がってくださいですの!?!」

黒子が魅南の前に立ちながら言った。

「黒子ちゃん!?!」

「わたくしはLEVEL4の能力者。勝てないまでも時間を稼ぐことは出来ますわ!?!」

「でもっ!?!」

「早く魅南先輩はにげてくださいまし!?!」

「…分かったわ。怪我しないでね」

そう言って魅南はその場から走り去った。

そして黒子はファンガイアと対峙していた。

「キシヤアアア!!」

ファンガイアは叫ぶと黒子に向かって走り出した。

「その程度では触れることすら出来ませんわよ!!」

黒子はファンガイアがつく前にテレポートをして後ろに回った。

そして銀のダーツをファンガイアの中にテレポートさせた。

しかし…

「キシヤアアア!?!」

ファンガイアはまるで効いていないようにそこに立っていた。

そして黒子に向かって鱗粉のような粒子を放ってきた。

「そんなものあたりませんわ!!」

黒子はテレポートを繰り返し鱗粉が当たらない距離まで回避した。

そして再び銀のダーツをファンガイアの中にテレポートさせた。

しかし結果は同じだった。



（どうすればいいんですの!?!）

黒子はテレポートを使いうまく立ち回りながらファンガイアに決定打を与えることを考えていた。

しかし普通有能力者が力を超越した進化型能力者に勝てるはずがなかった。

「キシヤアアア!?!」

そして黒子は考え事に氣をとられていたためファンガイアが接近していることに気付いていなかった。

「しまっ!?!?」

黒子はテレポートしようとしたがとっさの事で演算がうまくいかずにファンガイアに殴り飛ばされた。

「キシヤアア!?!」

ファンガイアの表情は分からないが今の黒子には笑っているように見えた。

一方魅南はファンガイアからはあまり離れていない場所にいた。

「キバット!! キバット来なさい!?!」

魅南は狭い路地でキバットを呼んだ。

「待ってましたあゝ!!」

キバットは狭い路地の上から旋回しながらやってきた。

「早くしないと黒子ちゃんが危ないの!!」

「分かってるぜ!!じゃあ早速行くぜ!!」

「ええ!!」

そう言うとき魅南は手を上にかざした。

「キバっていくぜ!!ガブッ!!」

キバットは魅南の手に噛みついた。

すると魅南の体に奇妙な模様が浮かび上がった。

そして魅南の腰の辺りにベルトらしきものが現れた。

魅南はキバットをつかんだ。

「変身!!」

そう叫んでキバットを腰のベルトに装着した。

すると魅南の体が鎖に包まれた。

そして鎖が弾けたとき魅南の姿は紅の鎧に包まれていた。

その姿はキバそのものだった。

「よし、待っててね黒子ちゃん…」

そう呟きキバは黒子達がいた場所に向かって走り出した。

黒子はファンガイアが迫ってきているのにも関わらず動けずにいた。  
何故ならファンガイアに殴り飛ばされた時に足をくじき動けなくなっていたのだ。

（万事休すですの…）

そんなことを考えてるうちにファンガイアは近づいてくる。

しかも恐怖をあおっているのか妙に歩きが緩やかだった。

（テレポートは…上手くできませんの…）

痛みで演算に支障が出てうまく演算の式をたてられなくなっていた。

そしてファンガイアは黒子の前で立ち止まった。

（お姉様…）

黒子が覚悟を決めて目をつむった。

すると…

「キシヤアア!？」

ファンガイアが叫びをあげて吹っ飛んでいた。

(何が起こったんですの…)

黒子は何が起こったか確かめるべく目を開けた。

すると目を開けた先には紅の鎧をまとった戦士がいた。

「あなたは下がちなさい」

キバは黒子に優しく告げた。

「あなたは誰ですの？」

「私はキバだ」

「キバ……？」

黒子はキバが行った言葉を復唱した。

そしてキバがファンガイアに向かって走り出した。

「はあっ!!」

キバは勢いをつけてファンガイアに殴りかかった。

そしてそのまま一回転して回し蹴りを食らわせた。

「キシヤアアアア!？」

ファンガイアはキバの攻撃を食らいバランスを崩した。

(すごい…わたくしが全力で能力を使っても傷一つ付けられなかったのに…)

黒子はキバの力に感心していた。

キバはバランスを崩したファンガイアに近づき連続でパンチを繰り出した。

ファンガイアはキバのパンチを食らい苦しもうになった。

「はっ!!!!」

キバはパンチを繰り出したあとファンガイアを蹴り上げた。

ファンガイアは完全にバランスを失い背中から地面に叩きつけられた。

そしてキバは一旦ファンガイアから距離を置いた。

「動けないの？」

キバはファンガイアから目を離さず黒子に話しかけた。

「だ、大丈夫…痛っ!？」

「あまり無理はしないほうがいいわ」

キバは黒子に優しく語りかけた。

すると倒れていたファンガイアが起き上がった。

「なかなかしぶといわね」

キバはそうつぶやくとファンガイアに向かって走り出した。

するとファンガイアは走ってくるキバに向かって鱗粉の粒子を放った。

「うわっ!？」

キバは両手を交差して防ごうとしたが全体に降り注いだ粒子を防ぐことが出来ずにダメージを食らってしまった。

だがキバは止まらなかった。

「ふっ!!!」

キバはファンガイアの腹めがけて拳を突き出した。

ファンガイアはキバの拳をもろに食らいのけぞった。

そこに追い打ちをかけるように回し蹴りをファンガイアに放った。

ファンガイアはキバの回し蹴りを食らい数m吹っ飛び停止した。

「今だぜ!!! キバ!!!」

「分かってるわ!!」

キバはキバットの言葉に反応した。

そしてベルトの脇についていた笛：フエッスルを取り出した。

そのフエッスルをキバットの口に装着した。

「wake up!!」

キバットが叫ぶとまだ少し明るかった空が真っ暗になった。

「どうなってますの!?!」

黒子はいきなり暗くなった空に驚きを隠せずにいた。

そしてキバの右足についていた鎖が一気に弾け飛び力が解放された。

キバは力を解放された足と反対の足で空中に飛び上がった。

そしてキバは一回転してファンガイアに向かって蹴りをはなった。

「ハアアアアアッ!!」

キバの蹴りはファンガイアの腹を捉えて吹っ飛ばした。

ファンガイアは倒れ込み動かなくなった。

そしてファンガイアはガラスが碎けるように碎け散り跡形もなくな

った。

「これにておしまい」

キバはそうつぶやくと黒子の方に歩み寄ってきた。

黒子の前まで来るとキバはしゃがみこんだ。

「どこか怪我したところある？」

キバが黒子に聞くと黒子が右足を見せてきた。

「足を挫いてしまったのですが大丈夫ですの」

「でも一応診ておこうか」

そう言ってキバは黒子の足を触った。

「……これならすぐに治るよ」

「本当ですか？」

「うん。全治二日くらいだと思っよ」

「何から何までありがとうございますですの」

そう言って黒子はキバに頭を下げてきた。

「大丈夫それが仕事だからね」



キバが言うとうとうやくアンチスキルが来るのが見えた。

「あとはアンチスキルに任るわ。じゃあね」

そう言ってキバは飛び上がりビルの上に乗った。

そしてすぐにキバの姿は見えなくなった。

（キバとは一体何者なのでしょう…）

そんな事を考えているとアンチスキルに混じって魅南がやってきた。

魅南は黒子を見つけると急いで駆け寄ってきた。

「黒子ちゃんどうしたの!？」

「ちょっと足を挫いてしまったのですの!」

「すぐに病院に行かないと」

「これくらい大丈夫ですの!」

「駄目よ。早く医者に診せないと」

「だから大丈夫って何をやっているんですの!？」

魅南は黒子の事をお姫様抱っこをして抱えていた。

「黒子ちゃんが歩けないなら運んであげようかと思って」

「大丈夫ですからおろしてください!!!」

黒子が顔を真っ赤にして言ってくるので仕方なく降ろした。

そして黒子は事情聴取があると言うことでアンチスキルに連れて行かれた。

「やることもなくなったし帰って寝よう…」

そう言って魅南はキバットと共に家に帰って行った。

そしてその途中で上条と常盤台のLEVEL5が戦っていた橋を通りかかった。

「うわぁ…上条これはかなりの不幸みたいね」

魅南はボロボロになった橋を見ながらつぶやいていた。

そこにキバットが聞いてきた。

「まさかここにもファンガイアが!?!」

「違うよ。これを使った人には心当たりがあるわ」

「こんなことやるやつってどんな奴だよ…」

キバットは呆れたようにつぶやいていた。

そしてキバットはあることに気づいた。

「なあ魅南？」

「どうしたの？キバット」

「なんでどこも電気ついてないんだ？」

キバットに言われて周りを見渡すと電気が必要な時間なのにどこも電気がついていなかった。

「もしかしてこれって…」

魅南は何か悪い予感を覚えて寮に戻った。

そして部屋に入り冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中を見た魅南は手を床について固まっていた。

「どうしたんだ魅南？」

「冷蔵庫が使えなくなってるの…」

「だから？」

「明日にはこの中の食材は全部腐ってるわ…」

それを聞いたキバットは苦笑いをした。

そして魅南の部屋から「不幸よおおお！！」と言う叫びが聞こえたのは言うまでもなかった。

続く  
...

## キバの後継者（後書き）

感想待ってます！！

## 主人公設定（前書き）

今回はタイトルの通りです

ではwake up!!

## 主人公設定

名前…紅 魅南くれないみな

上条当麻と同じ高校に通っている。

容姿…髪型は茶色の髪を背中あたりまで伸ばして特に結ぶことなくおろしている。かなり清潔感あふれる髪の質をしている。スタイルは至って普通。

身長…162cm

体重…??Kg

能力…LEVEL0だがキバの鎧をまとう事が出来る不思議な体質の持ち主

性格…男女の隔たりなく平等に接する少女。あまり異性を意識しない

好きなもの（こと）…甘いもの、朝の散歩、上条いじり

嫌いなもの（こと）…トマト、めんどろなこと、勉強

口癖…「不幸よ」、「これにておしまい」

ジャッジメント177支部に所属している。

しかしさぼり癖があるため白井黒子によくしかられている。

実力的にはLEVEL3ほどの能力者なら素手で倒せる。

これはキバとなって戦っているうちに喧嘩になれてしまったためである



## 主人公設定（後書き）

感想待ってます♪

## 銀髪シスター（前書き）

ほとんど原作やアニメと同じです。

ではwake up!!

## 銀髪シスター

「暑い…」

それが朝起きた魅南の第一声だった。

真夏だと言うのにエアコンがぶっ壊れてしまっていたのだ。

何故なら昨日上条と魅南に突っかかってきた常盤台の生徒一御坂美琴が原因である。

「全く少しは他の人の迷惑を考えて能力を使ってほしいわ…」

魅南はぐったりとした様子で言う。

「はあ…おなか空いた」

魅南はそうつぶやいたが全く動く気配はない。

動いても冷蔵庫が壊れてしまい中の食材はとんでもないことになっているからだ。

「何で上条は私にまで不幸スキルを回してくるのよ…おかげで私まで口癖が『不幸よ』になっちゃったじゃない…」

魅南はとなりの部屋にいる住人上条当麻に文句を言っている。

まあ聞こえてはいないのだが。

「ねえキバット、何か買ってきて」

「やだね。て言うか持てないし」

魅南の言葉を聞いたキバットがそう言う。

「役立たず…」

「何だと！？誰のおかげでキバになれると思ってんだ！！」

「だったら言わせてもらうけどあんたは誰のおかげで今まで飢え死にしていなと思ってんの！！」

魅南とキバットがお互いににらみ合っていた。

それはまさに火花が散ると言う表現がバツチリ合うような睨み合いだった。

だがそんな二人の耳に隣の部屋から叫び声が聞こえた。

「ぐぎゃああああ！！」

それは隣の部屋にいた魅南でさえ耳をふさいでしまうほどの声だった。

「なんなの朝から叫んで…」

「まあどうせまた不幸スキルが発動したんじゃないか？」

「それもそうね。私ちょっと様子見に行こうかしら」

そう言って魅南はパジャマを脱いで制服を着た。

そして上条当麻の部屋に向かった。

「どうしたの上条？」

魅南は扉を開けて上条に向かって言った。

するとそこには腕を銀髪のシスターに食われている上条がいた。

「…」

魅南は無言で扉を閉めようとした。

「待って！！俺を置いていかないでくれえ！！」

と上条があまりにも情けない声で頼んできたため魅南は仕方なく家に上がった。

「で、これはどういう状況？」

目の前で菓子をはおぼる銀髪シスターを見ながら魅南は上条に聞いた。

「えっとですね。さっきベランダに出たら干されてた」

「……」

「何だその人を小馬鹿にした目は！？」

上条は魅南を指差しながら叫んだ。

「小馬鹿じゃなくてモロにバカにしてんのよ？」

「結局バカにしてんじゃねえか!!」

「まあそれは置いてこの子は誰？」

魅南は銀髪シスターに視線をやりながら上条に聞いた。

「いやだから俺も今あったばかりだからしらねえよ」

「ふうん？まあ期待はしてなかったけど」

なんだと!!と怒る上条をスルーして魅南は菓子をはおぼる銀髪シスターに話しかけた。

「ねえあなたは何て名前なの？」

「ん？私はインデックスって言うんだよ？見ての通り教会の者です」

銀髪シスターから名前を聞いた魅南は上条と目を合わせた。

「目次？」

「ってどう聞いても偽名じゃねえか!!」

上条はテーブルを叩きながら言った。

「あ、バチカンの方じゃなくてイギリス清教の方だね」

「意味わかんねーし!!」

そして上条は魅南と一緒にインデックスと名乗る銀髪シスターに背を向けた。

「なまあ妙だと思わないか？」

「何が？」

「言ってることはともかくどうもこの学園都市の人間じゃあなさそうだしどうやって入り込んだんだ？」

「それもそうね。でも学園都市の警備は厳重よ？」

それにと魅南は話を続けた。

「人の出入りは門で完全<sup>ゲート</sup>に走査<sup>スキャン</sup>されてるわ。空の上では工業大学が打ち上げた監視衛星もあるわ」

「つてことは門と一致しない不審者がうろつけばあっという間に捕まるはずなんだけどな…」

「もしかして昨夜の大規模停電のせいで…」

魅南が言うとお上条は思い出したくないとかばかりにインデックスに向き直った。

「で、何だってお前はベランダに干してあったんだ？」

「干してあったんじゃないくて落ちたんだよ？ 追い詰められて隣の屋上に飛び移ろうとしたとき背中を撃たれてね」

そのとき魅南はファンガイアを連想してしまった。

しかし話はまだ続きがあった。

「私は『禁書目録』だから：私の持つてゐる十万三千冊の魔導書それが連中の狙いだと思う」

「「連中？」」

魅南と上条は声を合わせて聞いてしまっていた。

「マジックキャバル  
魔術結社だよ」

インデックスが言うと魅南と上条は目を合わせた。

「ゴメン無理だ。魔術は無理だよ」

「私も信じられないわ。ここは科学の街なの」

「だからこそ科学以外の無関係な代物は信じられないんだ」

二人の言葉を聞いたインデックスは頬を膨らませていった。

「魔術はあるもん」

するとインデックスが床を転がりながら叫び始めた。



「魔術はあるもん魔術はあるもんあるもんあるもん!!」

「だったら何か見せてみろって!!」

「そ、そしたら信じるからまず叫ぶのはやめて!!」

二人は耳をふさぎながらただをこねるインデックスに言った。

「わ、私は使えないもん魔力がないから」

やっと叫ぶのを止めたインデックスが立ち上がった。

「ふーんだ超能力なんてエラソーにつ。君達にだって何が出るって言うの? 超能力を信じるのに魔術を信じないなんてへーん」

インデックスの言葉を聞いた上条から何かがキレた音を魅南は聞いた気がした。

そして上条はインデックスの胸ぐらを左手でつかんだ。

「世の中ナメてねえか? お前」

するてインデックスが何かを見つけたようにどこかへ走り出した。

「上条お前やりすぎよ?」

「でもよお…ってわああ!?!」

上条が慌てていたのでそちらを見た。

するとそこには包丁を持ったインデックスがいた。

「インデックスちゃん!？」

魅南も驚きインデックスをなだめるように言った。

しかし次にインデックスの口から出た言葉は驚くものだった。

「刺してみて」

「「はぁ!？」」

「この服は協会として必要最低限な要素だけ詰め込んだ服の形をした協会何だから!包丁で刺されても傷一つつかないんだから!」

自信満々に言ったインデックスは魅南と上条に包丁を持たせようとした。

「だ、だったらいい方法があるわ!」

そう叫んだ魅南を上条とインデックスが見つめた。

「上条の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）って言う力が宿ってるの」

「イマジンブレイカー?」

「そ、そう。もしインデックスちゃんのその修道服が本当に魔力があるなら上条の右手に触れただけで修道服が壊れるはずよ?」

「おお!! その手があったか!!」

上条はいいことを思いついたとばかりに歓喜していた。

しかしインデックスは信じている様子はなかった。

「君の力が本当な・ら・ね」

「やってやろおじゃねえか!!」

そうさけんで上条は右手を振り上げた。

そしてインデックスの修道服に触れた。

しかし何も起こる気配はなかった。

と思った次の瞬間インデックスの修道服がひらりと落ちてインデックスの体があらわになった。

「!?!」

「上条お!! 見るなあ!!」

そう言って魅南は上条の頭を思いつき蹴り飛ばした。

上条は魅南の蹴りを食らい背中から倒れ込んだ。

「ふ、不幸だ…」

魅南はそんな上条をほっというインデックスに駆け寄った。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも…」

泣きながら言うインデックスはあまりにもかわいそうだったので魅南は修道服を直してあげることにした。

しかし魅南は何も持ってきていないため仕方なく安全ピンで留めておくことにした。

「上条！？学校に行かないと遅刻よ！？」

魅南は時間を見てようやく補習と言うことを思い出した。

「やっべ！？で、お前はどうすんだ？」

上条はインデックスに聞いた。

すると小指を角にぶつけ転び転んだ衝撃でケータイを壊してしまっ  
た。

「ふ、不幸だ…」

「相変わらずの不幸っぷりですこと」

それを見たインデックスがクスクス笑っていた。

「不幸って言うよりドジなだけかも？」

インデックスはそう言って上条の部屋を出て行った。

その後ろを魅南と上条が追いかけていった。

「で、結局どうすんだ？」

「出てく。いつ敵が来るか分からないし」

「敵って…そんな追われてる子をほっておけないわ!!」

魅南がインデックスに向かって叫んでいた。

するとインデックスがじゃあと言葉を二人にかけてきた。

「地獄のそこまでついてきてくれる？」

その言葉に魅南は絶句してしまった。

そんな魅南を置いてインデックスは走り出していた。

「おいこの先ひとりですいよって言うんだ!？」

上条は走り出していたインデックスに叫んだ。

「大丈夫!教会まで行けばかくまってもらえるから!」

そう言ってインデックスは二人の前から姿を消した。

「行っちゃった…ってやべえ!?!補習が!?!」

「本当だ!! もう時間がないわ!？」

「走るぞ!!!」

「うん!!」

そう言って二人は学校に走っていった。

ようやく学校に到着した二人は机に突っ伏してぐったりしていた。

「すっかり夏休みモードですね上条ちゃん紅ちゃん。先生気合い入れて小テスト作ってきたのですよ」

「ぐへー…」

「先生私もう疲れました…」

二人は小萌先生から小テストを受け取りながら言っていた。

そして魅南はインデックスのことを思い出していた。

（地獄の底…か）

魅南はインデックスの言っていた言葉を噛みしめていた。

すると魅南の近くの窓がたたかれる音がした。

たたかれる音がしたほうを見るとキバットがいた。

（ファンガイア！？）

魅南は立ち上がって小萌先生に言った。

「ちょっと私トイレに行ってきます！！」

「く、紅ちゃん女の子がそんなことを叫んではだめなのですよ！！」

「分かりました先生！！」

そう言って魅南は教室から出て行った。

そして学校の外に出てキバットと合流した。

「キバット場所は！？」

「この近くの公園だ！！」

「よし急ぐわよ？」

「よっしゃキバっていくぜ！！」

そう言って二人は全力疾走で公園に向かった。

公園につくとファンガイアがとある少女を襲っていた。

とある少女とはまさに朝分かれたばかりのインデックスだった。

「キバット行くわよ!!」

「よっしゃ行くぜ!!」

そして魅南はキバットをつかんだ。

「ガブッ!!」

キバットは魅南の左手に噛みついた。

すると魅南の体に不思議な模様が浮かび上がり腰にベルトが現れた。

「変身!!」

魅南は腰のベルトにキバットを装着した。

そして魅南はキバへと変身した。

キバは走っていきファンガイアに跳び蹴りを食らわせた。

「グワッ!」

ファンガイアは短くうめき吹っ飛ばされた。

そのファンガイアはクワガタのような容姿をして両手には刃のようなものを取り付けられていた。

「大丈夫?」

キバはファンガイアから目を離すことなくインデックスに話し掛け



た。

しかしインデックスは警戒しているのか全く話そうとしない。

「キシヤアアア!!」

ファンガイアは起き上がりキバに向かって走ってきた。

キバもファイティングポーズをとるとファンガイアに向かって走り出した。

キバが走ると右足につけられた鎖がガシャガシャと規則的になった。

「はっ!!」

キバは走っていた勢いをそのまま乗せたパンチをファンガイアに叩きつけた。

そしてそのまま連続でパンチを繰り出した。

「はぁっ!!!!」

キバは力をためると蹴りを放ちファンガイアをぶっ飛ばした。

「そろそろ行くよキバット!!」

「いいぜ!!」

キバットが答えるとキバはフェッスルを取り出した。

「キシヤアアア」

だがファンガイアが腕についた刃から斬撃を放ってきた。

「くっ!?!」

キバはなんとか斬撃をかわすことが出来たがバランスを崩しさらにフェッスルを弾き飛ばされてしまった。

そんなキバにファンガイアが追い討ちをかけてきた。

両手についた刃でキバを連続で斬りつけた。

「うわっ!?!」

キバは攻撃を連続で食らい吹っ飛ばされてしまった。

「あまり調子に乗らないことね」

キバはそう言いながら立ち上がった。

そしてファンガイアに向かって走り出した。

「キシヤアアア!?!」

ファンガイアも追撃するように走り出した。

そして両手についた刃をキバに向かって振り落とした。

「何回も食らわないわ!?!」

キバは両手を交差させて刃を防いだ。

「はぁっ!!」

キバは交差させていた両手に力を入れて押し返した。

そしてバランスを崩したファンガイアに蹴りを放ち吹っ飛ばした。

「これでお終いよ!!」

キバは吹っ飛ばされたフェッスルを拾い上げキバットに装着した。

「wake up!!」

キバットが叫ぶとまだ昼を過ぎたばかりだと言うのに辺りが夜になった。

そしてキバの右足の鎖が一気に弾け飛んだ。

(これって魔術!?)

インデックスはキバが使った力にわずかに魔力を感じていた。

そしてキバは飛び上がった。

「はぁぁぁぁぁ!!」

キバは雄叫びをあげながらファンガイアに向かって蹴りを放ってきた。

そしてファンガイアは避けることが出来ずにキバの必殺技をモロに食らった。

「グワアアアアア!？」

ファンガイアは絶叫を上げてガラスが碎けるように碎け散った。

「ふう…これにておしまい」

「あなたは一体何者なの？」

一息ついていたキバに警戒を解かないままインデックスが問いかけてきた。

しかしキバは答えることなくその場を去った。

そしてキバはあまり人目のないところで変身を解いた。

「戻らないとヤバイ!!」

魅南は補習に戻ったが結局ついた頃には終わってしまった。

魅南は小萌先生に説教をされた後ようやく帰ることが出来た。

そして上条と下校していた。

「お前何やってたんだよ？」

「別にいいじゃない!!」

「もしかしてサボってたのか？」

「なっ！？そんな訳ないでしょ！！」

「いやゝわかんねえよお前結構サボりそうな顔してるし」

「どんな顔よ！？」

などと二人が話しているといつの間にか寮に到着していた。

エレベーターを上がり二人の部屋があるところまで来た。

すると上条の部屋の前で清掃ロボが何かを掃除していた。

「なあ上条。あんた部屋の前で清掃ロボが掃除してるわよ？」

「何！？まさかどっかの酔っ払いが人の部屋の前でゲロゲロやりやがったのか！？」

「わざわざここまで来ないわよ…」

それもそうかとうなずきながら清掃ロボが掃除しているものをみた。

するとそこには血だらけのインデックスがいた。

「なっ！？」

「や、やめろ！！」

上条と魅南と二人で清掃ロボをどかして血だらけのインデックスを抱きかかえた。

「ひどい出血だわ早く病院に連れて行かないと危険よ!？」

「くそっ!! 誰がこんな事をやりやがったんだ!!」

上条が叫びながら壁を思いっきり殴りつけた。

すると返ってこないはずの返事が返ってきた。

「僕たち魔術師だけど？」

つづく…

## 銀髪シスター（後書き）

頑張ってオリジナルストーリーをいれたいとおもいます！

感想待ってます♪

## 炎の魔術師

「僕たち魔術師だけど？」

魅南と上条は声が聞こえた方を振り返った。

そこに立っていたのは身長を2mを越す長身に赤い髪を肩まで伸ばした黒装束の神父だった。

しかしその耳や指にはアクセサリーが大量に付けられ目の下にはバーコードが刻まれていた。

そしてくわえたばこをしていた。

そんな赤髪の神父を見たとき上条と魅南はぞわりとした悪寒に襲われた。

「うん？ うんうんこれはまた随分と派手にやっちゃって神裂が斬ったって話は聞いたけど…ま、死にかけだろうと回収はするけどね」

「回…収？ 回収って何を回収する気なのよ！！」

軽い調子で言う赤髪の魔術師に魅南は叫んだ。

「ん？ ソレの持ってる魔導書の事だよ」

「魔導書だか何だかしらねえがこんな女の子を寄ってたかって…！ だいたいこいつは魔導書なんか持ってたねえじゃねえか！！」



上条は怒りを剥き出しにして赤髪の魔術師に向かって叫んでいた。

「完全記憶能力って言葉知ってるかい？」

赤髪の魔術師はたばこの煙をはきだしながら言った。

「魔導書はそれの中にあるのさ」

「それの中……」

魅南は赤髪の魔術師の話を聞いてインデックスを見た。

そして赤髪の魔術師は話を続けた。

「君達なんかには意味は分からないだろうけどそれを扱える連中に渡ると厄介なんだ」

「だからあなた達はインデックスちゃんを斬ったの？」

魅南は赤髪の魔術師を睨みつけながら聞く。

「それは違うな。なんの因果で歩く教会が破壊されたか分からないけど神裂がソレを斬ったのはあくまでも保護のためだよ」

「保護……だと？」

上条は赤髪の魔術師の口から出た保護という言葉に反応した。

また魅南も同じように反応していた。

「そうだよ保護だよ。それにいくら良識と良心があったって薬物と拷問には耐えられないだろうし」

そこで赤髪の魔術師はたばこの煙をはきだした。

「そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう？」

あくまでも軽い調子で言う赤髪の魔術師について上条と魅南の怒りが爆発した。

「てめえ何様だ!!」

上条は魅南よりも早く飛び出し赤髪の魔術師に殴りかかった。

それでも赤髪の魔術師は焦った様子は微塵もない。

「ステイルⅡマグヌスと名乗りたいところだけどここはへFortis931」と言っておこうかな」

ステイルと名乗った赤髪の魔術師は加えていたたばこを口から離れた。

「僕たち魔術師は魔術を使うときに真名を名乗ってはいけないという因習があってね」

そう言って手に持っていたたばこを寮の外に投げた。

「魔法名一殺し名かな」

寮の外に投げたたばこの火が一気に拡大して上条や魅南よりも大きくなった。

「炎よー巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは突っ込んできている上条に向かって炎を放ってきた。

「上条！！右手を前に！！」

魅南が上条に叫んだ瞬間爆発が起こり黒煙が一带を覆った。

「やりすぎたか？まあいい夏休みとやらで住民は残っていないようだしね。あとは…」

ステイルは新たにたばこを加えながら魅南を見た。

「君を殺せば後は終わりだ。ご苦労だったね。あとはゆっくり眠れ」

「あとは私だけ？笑わせないでちょうだい」

「何？」

ステイルは魅南の言葉にまゆをひそめた。

「あなたが倒したと思ってる男はあなたみたいなへっぽこには負けないわ」

「ふっ何を言い出すのかと思ったら…」

「よく見てみなさい。あなたが炎を放った場所を」

魅南に言われたとおりステイルは炎を放った場所を見た。

すると黒煙の中から右手を前に突き出して立っているツンツン頭の高校生、上条当麻が無傷でそこにいた。

「なっ！？バカな！？」

「まったく何をビビってんだよ。インデックスの歩く教会をぶち壊したのだってこの右手じゃねえか」

上条が発した言葉にステイルの表情が変化した。

「炎だろうが何だろうがしょせんはただの『異能力』だ！！」

「くっ！？こんのお！！」

ステイルは再び上条に向かって炎を放った。

だが上条が右手で触れただけで炎は消えてなくなっていく。

「そうかやつとわかったよ。歩く教会が誰に破壊されたのか」

そしてステイルは近づいてくる上条を見ながら詠唱を始めた。

「世界を構築する五大元素の一つ偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして邪悪を罰する裁きの光なり」

ステイルが詠唱をしていると炎が手に集まっていく。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時に冷たき闇滅する凍える不幸なり」

ステイルの手に集まっている炎がだんだん形を変えていく。

「その名は炎。その役は剣。顕現せよ我が身を食らいて力となせ！」

すると炎は完全に形が変わり人型になった。

「魔女狩りの王、イノケンティウスその意味は―必ず殺す」

そしてイノケンティウスが上条に向かってきた。

しかし上条にあせりの表情は全くない。

「邪魔だ!!」

上条はイノケンティウスを右手で振り払った。

そして上条はステイルに突っ込もうとした。

「上条後ろよ!!」

魅南が上条に向かって叫んだ。

上条がとっさに後ろに右手をかざした。

するといつの間にか再生していたイノケンティウスが上条に拳を振り落としていた。

「くそなんで復活してやがんだ!？」

上条が右手でイノケンティウスの拳を受け止めながら叫んだ。

だが上条の右手に触れているのにイノケンティウスは消滅しない。

「どうなってやがんだ!？」

「上条!! そいつ消滅したそばから再生してるわ!!」

魅南が言ったとおりイノケンティウスは消えたそばから再生してきている。

このままでは上条が熱によりダウンしてしまう。

(ここは私が変身して上条を助ける!!)

魅南がキバットを呼ぼうとしたときインデックスが光り始めた。

「「神秘」「秘密」を指し示す二十四の文字にしてゲルマン民族により二世紀から使われる魔術言語で古代英語のルーツとされます」

インデックスがゆらりと起き上がり機械のように黙々と言葉を語っていた。

「い、インデックスちゃんなの...?」

「はい、私はイギリス清教内第零聖堂区「必要悪の教会」ネセサリウス所属の魔導図書館。正式名称Index—Librorum—Prohi

b t o r u mです」

魅南と上条はインデックスの言葉に驚きを隠せずにいた。

「魔女狩りの王を攻撃しても意味はありません。辺りに刻んだルーンの刻印を消さない限り何度でも蘇ります。例えるならそれは夜の湖に映る月と同じ。いくら水面を剣で叩いても意味はありません」

上条はイノケンティウスを受け止めながらインデックスの言葉を聞いていた。

インデックスの言葉はイノケンティウスが本体でないと言うことを示していたのだ。

「灰は灰に塵は塵に」

ステイルは両手から炎の剣を出した。

そしてその二つの剣を交差するように放った。

「吸血殺しの紅十字！！」

炎の剣は十字架のようになり両手がふさがった上条に向かっていった。

「上条危な」

魅南の言葉は轟音によって上条にとどくまえにかき消されてしまった。

そして黒煙が晴れたときそこに上条の姿はなかった。

何故なら上条は他の階に飛び移り事なきを得ていたのだ。

それを見た魅南は胸をなで下ろしていた。

「よかった…」

「安心するのは早いんじゃないかな？」

ステイルが魅南に言ってきた。

そちらを見るといつの間にかイノケンティウスがいなくなっていた。

「あの炎の塊はどうしたの？」

「ん？イノケンティウスのことかい？それならさっきの奴を追いかけていったよ」

「そう…」

「だけど安心しなよ。イノケンティウスがいなくても君を殺すのは容易いことだよ？」

そう言ってステイルは手のひらから炎を出した。

「負けるのはあなたの方よ!!」

「何だと？」



「キバット来なさい!!」

魅南が叫ぶとどこからかキバットが現れた。

「キバっていくぜ!!」

魅南はキバットをつかんだ。

そしてキバットは魅南の左手に噛みついた。

魅南の体には不思議な模様が浮かび上がり腰にはベルトが現れた。

「変身!!」

そう叫んで魅南はキバットをベルトに装着した。

すると魅南はキバに変身した。

「なんだ…その姿は!?!」

ステイルはキバの姿を見て驚愕していた。

「そうね…さしずめ紅の鎧と言ったところかしら?」

「紅の鎧だと?」

「そう紅の鎧。まああなた達の魔法名と同じようなものよ」

「なるほど。ならその姿は本気の姿と言うわけか」

ステイルはたばこをふかしながらキバの姿を分析していた。

「じゃあ始めましょう」

そう言ってキバはステイルに向かって走り出した。

「炎よ。巨人に苦痛の贈り物をおお!!」

そう叫びステイルは炎の球体をキバに向かって放った。

キバはわずかに体をずらして炎の球体をかわした。

そしてステイルの前で立ち止まりキバは拳を突き出した。

「甘いな!!」

ステイルは体をずらしてキバの拳をかわした。

そしてステイルは炎の剣を作り出してキバの体を横風に切り裂こうとした。

「うっ!?!」

キバは思いっきり後ろに跳躍してステイルの剣をかわした。

だがキバが着地したところにステイルが炎の球体を放ってきた。

「うわっ!?!」

キバはステイルの炎の球体を食らい背中から叩きつけられた。

そして紅の鎧が焦げて煙がわずかにあがっていた。

「熱っっ。怒った！！キバットこれを使うわ！！」

「オッケー行くぜえ！！」

キバはベルトの脇についたホルダーから緑のフェッスルを取り出した。

そしてキバットに装着した。

「バッシアーマグナム！！」

キバットが叫ぶとどこからか緑色の銃が飛んできた。

そしてキバがそれを右手でつかむとキバの姿が変わった。

キバの姿は緑を基準とした姿（以後Bキバと表記）になった。

「さあ炎は水で消してあげるわ！！」

そう言ってBキバはステイルに向けていた銃の引き金を引いた。

すると銃口から水の銃弾が放たれた。

「くっ！？巨人に苦痛の贈り物を！！」

ステイルも水の銃弾に向かって炎の球体を放った。

二つの攻撃はぶつかり合いお互いに相殺しあった。

「くっ!?!」

「隙あり!?!」

Bキバの攻撃にバランスを崩したステイルに向かって水の銃弾を放った。

「ぐわあっ!?!」

ステイルはBキバからの水の銃弾を食らい背中から叩きつけられた。

しかし水の銃弾があたったのにも関わらずステイルからは出血は見られない。

どうやらとっさに炎を撃って威力を軽減したようだ。

それと同時にあたりにスプリンクラーから水が出てきた。

「残念、私の出番は終わりみたいね」

そう言ってキバは変身を解いて魅南の姿に戻った。

「何故変身を解いた?」

ステイルは苦しそうに立ち上がり聞いた。

それと同時にエレベーターから誰かがあがってきた。

「上条が来たからよ？」

エレベーターが開くとそこにはわずかに服が焦げたツンツン頭の上条当麻がいた。

そしてステイルは上条が来たことに驚いていた。

「ずいぶん遅かったわね？」

「ああこれを剥がすのに手間取ってな」

そう言って見せたのは何かの記号が刻まれたコピー用紙だった。

するとステイルがいきなり笑い出した。

「スプリングラーごときで三千度の炎の塊が鎮められるとでも？それにコピー用紙はトイレットペーパーじゃないんだよ？水に濡れただけで溶けるものじゃない」

その言葉通りイノケンティウスは鎮火しないで上条達のところに向かってきた。

「確かにコピー用紙は溶けないわね」

「なんだ分かったのか？俺のやりたいこと？」

「ええ。この水はコピー用紙にかかれたインクを落とすものでしょ？」

魅南は上条が持ってきたコピー用紙を水に濡らしながら言った。

「ああ正解だ」

上条が言うのと二人の目前まで迫ってきていたイノケンティウスが消滅した。

「ば、バカな!？」

ステイルは恐怖が出てきたのか近づいてくる上条にたじろいだ。

「さあ上条ぶちかましてきなさい。その右手で!!」

「ああ!!」

上条は魅南の言葉に返事をしてステイルに向かって走り出した。

（そうだよな：地獄の底までついて行きたくなきゃ、地獄の底から引き上げてやるしかねえよなあ!!）

そして上条の拳はステイルの顔面を捉えた。

「ぐわあ!!」

ステイルは叫び声を上げて濡れた床に倒れ込んだ。

そしてぴくりとも動かなくなった。

「やったわね上条」

「はあはあ…ああ…」

二人が勝利を実感していると消防車やらアンチスキルやらが駆けつけてきた。

「移動するわよ上条。インデックスちゃんを連れてとりあえず下の階に行くわよ。上条はインデックスちゃんをおぶってね」

「おい魅南…お前は命をかけた殺し合いをしてた人に向かってそれはないんじゃないか？」

「うるさい。今はそんな事言ってる場合じゃないでしょ？人の命がかかってるの」

今までに見たことがないような表情で言われて上条は頷き寮を出た。

「出血が多すぎるわ…」

「やっぱり救急車呼ぶしか…」

二人がインデックスの怪我の状態に何もできずにいるとインデックスが目を覚ました。

だが汗がにじんでおりかなり苦しそうな表情だった。

「大丈夫…だよ？とにかく血を…止めれば…がぼっ!？」

インデックスがはなしている途中で血を吐き出した。

どうやら見た目以上に怪我はひどいようだった。

「なあお前の十万三千冊に傷を治すような魔術はないのかよ!!」

「あるよ…私が術式を…教えてちゃんと手順を踏めば…誰にでもできと思う…」

「じゃあ俺（私）がやる（わ）!!!」

二人は同時に叫んでいた。

だがお互いに何かを言うようなことはなかった。

それだけ切羽詰まった状況なのだ。

「無理だよ…この街の人達には魔術は…使えない…」

「どうして…」

魅南が泣きそうな表情を浮かべて独り言のようにつぶやいた。

「魔術って言うのは元々能力のない一般人が君たち（能力者）と同じ力を得るために生み出されたもの…なの…だから能力の開発を受けたこの街の人は魔術を…使えないの…」

「だったら能力開発を受けてない大人なら!？」

「多分大丈夫…だよ」

「上条行くよ!!」



そう言って魅南と上条は走り出した。

そしてたどり着いた場所はボロボロのアパートだった。

アパートの階段を上りとある部屋のインターホンを押した。

「はぁーい今出ますよーどちら様ですうー？」

中から甘ったるい声が聞こえてきた。

そして中から出てきたのは高校の担任の小萌先生だった。

「こんばんわ先生あがらせてもらいますね？」

魅南はそう言って強引に入っていた。

「ま、待ってください紅ちゃん！？」

「先生、今人一人の命がかかってるんです！！」

「えっ！？ってどうしたんですかその子は！？」

小萌先生は口を手でふさいで顔を真っ青にしていた。

そして上条はインデックスを小萌先生の部屋に寝かせた。

するとインデックスが再び感情の乗っていない声で話し始めた。

「出血による生命力の流失が一定量を越えたため自動的に「自動書  
記」<sup>ペン</sup>で目覚めます。現状を維持すれば私の体はおよそ十五分後に絶

命します。指示に従って適切な処置を施していただければ幸いです」  
インデックスの感情の乗っていない声を聞いた小萌先生はあわあわ  
とうろたえていた。

一度これを体験した魅南でさえもうろたえているのだ仕方のないこ  
とだろう。

「先生、俺今から魅南と人呼んで来るのであとは頼みます」

「先生私からもお願いします。先生にしか頼めないんです!!」

そう言って魅南と上条は頭を下げた。

「わ、分かりました」

「じゃあ先生頼みます!!」

そう言って上条と魅南は小萌先生の家から飛び出した。

つづく…

## 禁書目録（前書き）

w  
a  
k  
e  
  
u  
p!  
!

## 禁書目録

翌朝魅南と上条は小萌先生の家に行くために二人で歩いていた。

「ねえ上条？」

「ん？どうした？」

「小萌先生にインデックスちゃんの事どう説明するの？」

「あ…」

上条は何も考えてなかったとばかりにつぶやいた。

そんなやりとりをしている間に小萌先生の家についた。

中に入ると小萌先生とインデックスが話していた。

「インデックス大：丈夫：か？」

上条はなぜかインデックスを見て言葉を切れ切れにさせていた。

魅南が不思議がりインデックスをみた。

するとそこにはうさみみのパジャマを着たインデックスがいた。

「か、かわいい！！」

魅南はインデックスに抱きついてしまった。

「く、苦しい…かも」

「あ、ごめんごめん」

そう言って魅南はインデックスから離れた。

「で、なんでビール好きで愛煙家で大人の小萌先生のパジャマがぴつたりあってんだ？」

「可愛いじゃん」

「いやでも年齢差いくつなんだこの二人？」

「うう…ん…分かんない」

魅南と上条の会話を聞いたインデックスと小萌先生がムツとした表情で上条を見た。

「見くびらないでほしい。私もさすがにこのパジャマの胸が苦しいかも」

「その発言はなめてるのです!!」

「ええ…でも」

「でも何なんですか？」

「別にいい？」

「うう：私大人なんですう」

二人がなにやらパジャマのことでもめていた。

そんな二人を見て魅南と上条はため息をついてしまった。

「ところで上条ちゃん、紅ちゃん。この子は一体二人の何様なんです！！」

小萌先生がインデックスを指差しながら言ってきた。

そして魅南は明後日の方向を見ていた。

「えっと：妹？」

すると小萌先生が頬を膨らませて起こり始めた。

「ねえ小萌先生？」

「何です紅ちゃん！！」

小萌先生は怒りながら魅南の方を向いた。

怒っていると言ってもあまり迫力はなかった。

「事情を聞きたいって事はこのことを学園都市の理事会に伝えるって事なんですか？」

「ですう紅ちゃんと上条ちゃんがどんな問題に巻き込まれてるか分からないですけどそれが学園都市の中で起きた以上解決するのは教

師の役目、大人の義務です」

そして小萌先生が魅南と上条の手を握った。

「二人が危ない橋を渡ろうとしてるのに黙ってみてるほど先生は子供じゃないのです」

小萌先生の真剣な目を見て今までふざけていた上条が真面目な口調になった。

「先生が赤の他人だったら遠慮なく巻き込んでるけど先生には借りがあるんで巻き込みたくないんです」

「かつこいいこと言うわね上条？」

「そうですよ。そんなことを言ったら先生は許さないんですよ？」

そう言って小萌先生がどこかへ行こうとしていた。

「先生スーパーに行ってご飯のお買い物してくるです。二人はそれまでに何をどう話すべきかきっちりかつちり整理しておくのですよ？」

そして小萌先生はそれと付け足しをした。

「先生お買い物に夢中になると忘れてるかも知れません。帰ってきたらズルしないで上条ちゃんと紅ちゃんの口から話してくださいなきやだめなんですからね：」

そう言って小萌先生は出かけていってしまった。

それを見た上条は畳に寝転がった。

魅南は窓際に座り込んでいる。

「すてきな人だね？」

「そうね」

「だけど小萌先生はこれ以上巻き込めないよな」

するとインデックスが真面目な口調になって話し始めた。

「そう。もうあの人は魔術を使っちゃだめ」

「どう言うこと？」

「魔導書つてのは危ないんだよ。そこに書かれている異なる常識や違える法則。そう言う違う世界って善悪の前にこの世界にとっては有毒なんだよ」

「有…毒？」

上条は信じられないとばかりにインデックスに聞き返していた。

魅南も同じような表情だった

「魔術師ならともかくこの世界の人間が違う世界の知識を知るとそれだけで脳は破壊されてしまうから」



「破壊って魔術ってそんなものなのか？」

そしてインデックスは聞いてきた。

しりたい？」と

それはインデックスが抱える十万三千冊のことだろう。

そして上条がインデックスに近づき言った。

「なんて言うかこっちが神父みたいだな？」

「なら私はシスターね？」

「ホントだね……十字教なんて元々一つなのにどうしてこんなに分かれちゃったんだと思う？」

そんなことを聞かれても分かるはずがないのだが上条は頭をひねらせた。

そしてインデックスが再び話し始めた。

「聖地を混ぜたからだよ。分裂し対立しバラバラの道を歩くことになった。同じ神様を信じてるのに。それぞれが独自の進化を遂げて個性を手に入れたんだよ」

「個性ねえ……」

「私の所属するイギリス清教は……」

インデックスはそこで一回言葉を切り一息ついてから再び話を続けた。

「イギリスは魔術の国だから魔女狩りや宗教裁判、そういう対魔術師用の文化が異常に発達したの」

魅南は近くにあった桶に入っているお絞りを絞った。

「だからイギリス清教には特別な部署があるんだよ。魔術師を討つために魔術を調べ上げて対抗策を練る。必要悪の教会、ネセサリウス」

魅南と上条はネセサリウスと言う組織に不思議がった。

「だけど汚れた敵を理解しようとすれば心が汚れ汚れた敵に触れば体が汚れる。その汚れを一手に引き受けるその部署最たるものが……」

インデックスがそこまで言うのと魅南はお絞りをインデックスの頭に乗せた。

「それが十万三千冊……」

上条が答えた。

「魔術って言うのは式みたいなものだから上手に逆算すれば相手の攻撃を中和させることも出来るの。世界中の魔術を知れば世界中の魔術を中和出来るはずだから。私には十万三千冊の魔導書が……」

インデックスの言葉で上条と魅南がキレた。

「たたき込まれた…」

「それも無理やり…」

二人の言葉にインデックスは頷いた。

「そんなヤバイもんなら読まずに燃やしちまえばいいじゃねえか」

「それもそうよね。それなのにどうして読まなければいけなかったのかしら？」

「重要なのは本じゃなくて中身だから。原典を消してもそれを伝え聞かせちゃったら意味がないの。それに原典の処分は人間には無理。正確には人の精神では無理なの。どうしようもないからこそ封印するしかなかったの」

「つまり連中はお前の中にある爆弾を手に入れたってことか」

上条が言うインデックスが布団に潜った。

「十万三千冊は全て使えば世界を例外なくねじ曲げることが出来る」

そこまで聞いて上条と魅南は完全にキレた。

何故教えてくれなかったのだと。

しかしそんな魅南の耳にバイオリンの音が聞こえてきた。

（言いたいことがあるのにほんと鬱陶しいわね）

魅南は心の中で悪態をつきながらも立ち上がった。

「上条すぐに戻るから二人で話してて」

そう言って魅南は部屋を飛び出した。

魅南が走り始めるとキバットが近くに飛んできた。

「早く終わらせるわ」

「どうした？そんなに苛ついて？」

「うるさい。早く終わらせるわよ？」

「分かってるよ！！」

魅南はいらいらしながらもファンガイアが暴れているところに向かった。

ファンガイアは小萌先生の家の近くの公園で暴れていた。

ファンガイアの両手にはハサミのようなものが取り付けられていた。

そして何故か小さな子供を襲っていた。

「早く助けないと！！行くわよキバット！！」

「よっしゃキバっていくぜえ！！ガブッ！！」

魅南の手にキバットが噛みついた。

魅南の体には不思議な模様とベルトが現れた。

「変身!!」

キバットを腰のベルトに装着した。

魅南はキバに変身してファンガイアに向かって走り出した。

「はぁぁっ!!」

キバは勢いを乗せて殴りつけた。

ファンガイアはキバの一撃を食らい仰け反ってバランスを崩した。

「早く逃げなさい!!」

キバは子供達に叫んだ。

一瞬子供達がビクツとしたがそんなことを気にしていなかった。

「まったくファンガイアにはロリコンがいるのかしら?」

「貴様キバの後継者か!」

「だったら何?」

「貴様も禁書目録を狙っているのか?」

「禁書…目録？」

そこでキバはインデックスと最初に会った時の事を思い出した。

インデックスは初めに自分のことを禁書目録と呼んでいた。

と言うことはこのファンガイアはインデックスを狙ってるということになる。

（魔術師にファンガイア。そんなに魔術の知識がほしいの！？）

キバは拳を力強く握りしめた。

「禁書目録は我々にさらに力を与えてくれる。力を欲するのはファンガイアだけでなく人間も同じであろう？」

「ふざけんじゃないわよ…」

「なに？」

「何が力を与えてくれるよ。あの子はそんなことをするために生きてるんじゃないの！！」

「貴様は禁書目録の居場所を知っているようだな？」

「知らないわ！！私が知ってるのはインデックスって言う友達だけよ！！あの子を物みたいに扱うな！！」

キバはそう叫んで腰のホルダーから青いフェッスルを取り出した。

そしてその青いフェッスルをキバットに装着した。

『ガルルセイバー』

キバットがそう言うところからかガルルセイバーが飛んできた。

キバがガルルセイバーを左手でつかむとキバの姿が青を基準とした姿に変わった。

この青い姿は『ガルルフォーム』（Gキバと表記）と呼ばれる狼のような身体能力をもった姿だ。

「ガアアアアッ!!」

Gキバは低い体勢でファンガイアに向かって走り出した。

そしてGキバはガルルセイバーで連続で斬りつけた。

「はっ!! はあ!! だあ!!」

Gキバは斬りつけたあとファンガイアを蹴り飛ばした。

「うわっ!？」

ファンガイアは蹴り飛ばされた衝撃で背中から叩きつけられた。

そしてGキバがガルルセイバーをファンガイアの首あたりに当てた。

「あんたの知ってることを教えなさい!!」

「教えろと言われて教えるわけねえよ!!」

ファンガイアはGキバの腹を思いっきり蹴り飛ばした。

「うっ!？」

Gキバが腹を押さえて後ずさった。

そしてファンガイアはGキバを連続で叩きつけた。

「はっはあ!! そんなもんか？」

ファンガイアはGキバに向かって言い放った。

Gキバは痛みでしゃがみ込んでいる。

「さっさと禁書目録の場所を教えな？」

「あまり調子に乗らない事ね!!」

Gキバはいきなり走り出してファンガイアを斬りつけた。

だがファンガイアはガルルセイバーの一撃をかわした。

「はっ、疲れてんじゃねえのか？」

「だから何？」

「さっさと諦めろよ!!」



ファンガイアはGキバをハサミでつかみあげようとした。

しかしGキバはそれをガルルセイバーで受け止めた。

「隙だらけよ!!」

Gキバはガルルセイバーでファンガイアのハサミを弾き返した。

「なっ!？」

ファンガイアは体勢を崩して完全に無防備になった。

「今だぜキバ!!」

「ええ!!」

Gキバはガルルセイバーの刀身をキバットに噛ませた。

「ガルルバイト!!」

キバットが叫ぶと周りが暗くなった。

Gキバはガルルセイバーをくわえて飛び上がった。

そして勢いをつけてファンガイアを斬りつけた。

「があああああ!!」

ファンガイアは絶叫をあげるとガラスが碎けるように碎け散った。

そして闇が晴れてキバの姿から魅南の姿に戻った。

「早く帰るわよ？」

「だからなんでそんなに苛ついてんだ？」

「うるさい。どうでもいいでしょ！！」

「うるさいとはなんだよ！！もうしらねえからな！！」

魅南にそういい残しキバットはどこかへ飛び立っていった。

「何よキバットの奴…」

魅南は不満を抱きながらも上条とインデックスがいる小萌先生の家に向かった。

すると会いたくもない奴と出会ってしまった。

「あんたは…」

「久しぶりね魅南。会いたかったわ」

「私はアンタみたいな化け物とは会いたくなかったわ麦野沈理」

麦野沈理は学園都市に七人しかいないLEVEL5の第四位だ。

「化け物とは失礼ね」

「違うのかしら？ たった一人でファンガイアの群れを倒した奴を化け物以外ではたとえられないわ」

「あのときは苦勞したわ。まさかあんなに出てくるなんてね。だけど魅南の力も十分化け物みたいなものよ？」

「まあ確かに私も化け物なのかもね。私の力の事を知ってるのは貴女だけだし」

「ふふっ。大丈夫よ？心配しなくても？誰にも言っていないし言うつもりもないから」

「それはありがたいわ」

「まあお友達の頼みだしね」

お友達と言う麦野の言葉を聞いて魅南の表情が和らいだ。

「お友達…か」

「どうかしたのかしら？」

「何でもないわ。それより貴女がここに来たのはただ話をするために来た訳じゃないんでしょ？」

「あら知ってたの？」

麦野はわざとらしく肩をすぼめた。

「もう一回聞いわ。『アイテム』に入る気はないの？」

魅南はその言葉を聞いたとき魅南の表情は再び警戒の表情になった。

「なんとも言うけど私は『表』の人間よ？『裏』の仕事を手伝うつもりはないわ」

「そう：だけどこれだけは言っておくわ。もし私の前に立ちはだかるのなら容赦はしないわ」

そう言った麦野から尋常でない殺気が放たれていた。

しかしそれも一瞬ですぐにおさまった。

「気をつけるわ。あなたと殺り合ったらただでは済まないからね」

「ふふっそれはお互い様よ？またね魅南」

「そうね。なるべく会いたくないけど」

そう言って魅南は麦野と別れた。

そして小萌先生の家に向かった。

小萌先生の家につくとすでに小萌先生が買い物から帰ってきていた。

上条の表情を見れば分かるが小萌先生はどうやら追求してこなかったらしい。

魅南はインデックスに自己紹介などをしていた。

そして夜になり上条、インデックス、魅南の三人は銭湯に向かってあるいていた。

「おっ風呂♪おっ風呂♪おっ風っ呂♪」

インデックスは歌いながら二人の前を率先してあるいている。

「ねえ上条？なんであんな上機嫌なの？」

「しらねえよ。風呂に入れるからじゃねーの？」

それだけで？と魅南は思いながらインデックスについていった。

するとインデックスが振り返った。

「とうま？みな？」

「どうした？」

「呼んでみただけ。用がないのに名前が呼べるのってなんか楽しいかも♪」

楽しそうに言うインデックスを魅南は見つめていた。

そして自分はこの笑顔を護れるのかと自分に問いかけていた。

返ってくるのは戦うしかないと言う答えだけが返ってくる。

「ねえとうま、みな。コーヒー牛乳ってなに？カプチーノみたいなもの？」

「そんなエレガントなものは銭湯にはねえ。けどお前には広い風呂

は衝撃的かもな？イギリスってせまっ苦しいユニットバスがメジャー何だろ？」

「へえ。そうなの？インデックスちゃん？」

するとインデックスがうんとうなった。

「その辺はよく分かんないかも」

「どうして？」

「私気がついたら日本にいたから。向こうの事はちょっと分からないんだよ」

「どうりで日本語ベラベラのはずだぜ」

上条は納得したとばかりに言った。

しかしインデックスの言いたいことはもっと複雑な事情があった。

「そう言う意味じゃないんだよ。私生まれはロンドンで聖ジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。どうもこっちに来たのは一年くらい前かららしいんだね」

インデックスの話聞いて上条と魅南はらしいと言う言葉が妙に多いことに気づいた。

「記憶がなくなっちゃってるからね。最初に目を覚ましたときは自分のこともよく分からなかった。昨日の晩御飯も思い出せないのに魔術師とか禁書目録とか必要悪の教会とかそんな知識ばかりグル

グル回ってホントに怖かった」

インデックスの話を聞いた上条と魅南の間に不穏な空気が流れた。

「じゃあどうして記憶をなくしちゃったかわかんないって事か!？」

「うん」

インデックスは軽い調子で答えるが魅南は一つの考えが浮かび上がっていた。

(あの魔術師のせいかな…)

魅南が拳を握りしめるとインデックスが二人に聞いてきた。

「どうも、みな何か怒ってる？」

「大丈夫怒ってないわ」

「怒ってねえよ」

魅南はなるべくインデックスに不安を与えないため笑顔で言ったが上条は不快感丸出しだった。

「みな。どうま何かキレてるみたいなんだよ？」

「大丈夫よ？」

「もしかして思春期ちゃん？」

「その幼児体型にだけは思春期とか聞かれたくねーよな」

上条は何気なく口に出したのだろうがインデックスの癪にさわってしまっていた。

「何なのかなそれ？ やっぱり怒ってるように見えるけど。それともあれなの？ 怒ってる振りして私とみなを困らせてる？ とうまのそう言う所は嫌いかも」

「あのなあ元から好きでもないくせにそんなセリフはくねよな。いくら何でもお前にラブコメ的素敵イベント期待しちゃいねえからさあ」

これもまた上条は何気なく口にしたのだろうがインデックスはそれで泣きそうになっていた。

「あれ！？ 何で上目遣いで黙ってしまうのですか！？」

「バカ上条！！ そんな事言ったら！？」

「とうま！！！」

インデックスが叫んだ方を魅南はギギギと首だけを動かしてみた。

そして次の瞬間インデックスは上条に噛みつきどこかへ行ってしまった。

「はあ…あんたがよけいなこと言うから…」

「不幸だ…」



魅南が上条を見て呆れているとバイオリンの音が魅南の耳に入ってきた。

（ホント最近多いわね。と言うより多すぎるわ…めんどくさいわね…）

魅南はため息をついていると上条が不思議そうな目を魅南に向けてきた。

「上条私用事出来たから後は任せたわ…」

「用事？っておいどこ行くんだ!？」

上条の質問に答えずに魅南は走り出していた。

だが残された上条に誰かが近づいていることに魅南は気付いていなかった。

つづく…



## 禁書目録（後書き）

次回から2話続けて戦闘パートです！！

感想待ってます♪

## 紅の鎧VSルーク

魅南は今何故か異常に人通りのない道路を駆け抜けていた。

最近は何故かファンガイアの出現率が高まり休む時間が全くなかった。

そんなことを考えながら魅南は道路を駆け抜ける。

「キバット来なさい!!」

魅南が走りながら叫ぶとキバットが空からやってきた。

そして魅南と並びながら飛び始めた。

「ファンガイアの場合は!?!」

「この先を行ったところだぜ?早く行くぜ!!」

「分かったわ!!」

そういった魅南は走り速さをさらにあげてキバットについていった。

そして五分位したところでファンガイアが暴れているのを見つけた。

そのファンガイアは人を襲っているようだった。

その人物は髪を長くして梅の髪飾りをしている少女だった。

「まずいわ。早く助けないと!!」

「よっしゃそんなじゃあキバっていくぜえ!!」

キバットがそう叫ぶと魅南がキバットを鷲掴みにした。

「ガブッ!!」

キバットが魅南の左手に噛みつき腰にベルトが現れた。

「変身!!」

魅南はキバットを腰のベルトに装着しキバの鎧を身にまとった。

そして走っていた勢いを殺さないままファンガイアに跳び蹴りを食らわせた。

キバの跳び蹴りを食らったファンガイアは体勢を崩しその場から離れた。

そしてキバが襲われていた少女とファンガイアの間に入るように立った。

「あなたは早く逃げなさい。なるべく遠くにね!!」

「わ、分かりました!!」

キバが少女に優しく告げると少女は一目散にその場から遠ざかっていった。

そして少女の姿が完全に見えなくなるのを確認するとキバはファンガイアに向き直った。

「貴様、俺のタイムアタックの邪魔をするな!!」

「タイムアタック? 何そのくだらない遊び? ファンガイアの中で流ってるのかしら」

キバはふざけながらファンガイアに言うが全く隙がなかった。

だが相手のファンガイアも隙がないのは同じだった。

そのファンガイアは羊のような顔をした強固な鎧をまとったファンガイアだった。

そのファンガイアからは今まで戦ってきたファンガイアからは感じない強さを感じていた。

「ん? よく見れば貴様はキバではないか」

「だから何? そう言うあんたは誰なのよ」

キバは臨戦態勢を保ちながらファンガイアに言い放つ。

「俺か? 俺は『チェックメイトフォー』のルークだ」

「なっ!?!」

キバはルークと名乗ったファンガイアに驚愕していた。

『チェックメイトフォー』とはファンガイアの中でもかなり強力な力を持つものだけに名乗ることを許される名だ。

チェックメイトフォーは全部で四人いてその四人の実力は並のファンガイアとは比べものにならないほどの力を秘めている。

「どうした？驚くことはないだろう。それとも俺の名を聞いて恐れを抱いたのか？」

「んなわけないでしょ？誰があんたなんかにはビビるもんですか。寝言は寝てから言いなさい」

キバはルークを挑発するように言う。

しかしルークほどの力になればそんな挑発には乗ってこなかった。

「強気でいるのはいいがいつまで保つかな？」

「なめないでほしいわね。あんたなんかには負けるわけがないわ」

それぞれが言い終えるとしばらくの沈黙が漂った。

そしてどこかの柱が崩れる音がした。

そのときにキバとルークは一斉に動き出した。

キバは勢いをつけて回し蹴りを放った。

対するルークは拳を突き出しキバの回し蹴りに対抗した。

二つの攻撃がぶつかり合いキバだけが吹っ飛ばされた。

「くっ！？なんて馬鹿力なのよ」

キバは吹っ飛ばされてから素早く体勢を立て直しルークに向き直った。

ルークは見た目どおりかなりの力の持ち主のようだった。

「弱いな。その程度でこのルークと殺り合おうとしたのか？」

「だったら何だっていうのよ！！」

キバはルークに向かって叫んだ。

そしてルークはキバの叫びに答えた。

「格の違いを知れ！！」

そう言ってルークは尋常でないほどの速さでキバに突っ込んできた。

「私も随分嘗められたものね。突っ込めば勝てると思ってるの？」

キバは足に力を入れて地面に踏ん張った。

そしてそのままルークの突進を受け止めようとした。

しかしルークのあまりにも強い力によってそのまま後ろに引きずられていく。



キバが踏ん張ったコンクリートの床はかかる力に耐えきれずに砕け散っていく。

「ぐっ!?!この馬鹿力め…」

キバは引きずられていくなか呟く。

そしてついに耐えきれなくなったキバはルークの突進を食らった。

「うわっ!?!」

キバはルークの突進をもろに食らい数メートル吹っ飛ばされた。

「なんだ非力だなキバよ。その程度が貴様の力か?」

「何よ、随分余裕そうじゃない。なら見せてあげるわ。私の本気をね!!!」

キバはそう叫んでルークに向かって走り始めた。

「見せてもらおうかキバの力を!!」

「上等よ!!」

キバは叫びながら跳び蹴りをルークに放った。

ルークはそれを防ぎキバにカウンターを食らわせようとした。

しかしキバは身を捻りルークの拳をかわすとルークの顔面に向かっ

て拳を突き出した。

「甘い!!」

ルークは拳を突き出したキバの脇腹に蹴りを放った。

「ガアッ…」

キバは意図も簡単に吹っ飛ばされ地面を二回三回とバウンドした。

「弱い弱すぎるぞキバァ!!」

ルークはキバに向かって愉快そうに言う。

「ちっ…この姿じゃ相性は悪いわね」

キバは立ち上がりながら一人で呟く。

そして腰のホルダーから紫色のフェッスルを取り出した。

「これを使うわ。いくわよキバット!!」

そう言ってキバットにフェッスルを装着した。

『ドッガハンマー』

キバットがそう叫ぶとどこからかドッガハンマーがとんできた。

キバがドッガハンマーを両手でつかんだ。

するとキバの姿が紫色を基準とした鎧が強化された姿になった。

その姿（以後Dキバと表記）はルークにも負けないような鎧をまとっていた。

「なるほどこれからが本番か？」

「当たり前よ。私がこの程度なわけがないでしょ？」

そう言ってDキバは走り出した。

そして勢いを乗せたドッガハンマーの一撃をルークに振り落とした。

「ふんっ!!」

ルークが両手を前に出してドッガハンマーの一撃を防ごうとした。

しかしDキバの一撃はさっきまでの力の比ではなく受け止めきれなかった。

「ガアッ!？」

ドッガハンマーの一撃を食らったルークは短くうめいた。

しかしDキバはそんなルークに追い討ちをかけた。

「はぁあっ!!」

Dキバはルークの腹にドッガハンマーを連続で叩きつけた。

そして一回転して勢いをつけてドッガハンマーをルークの脇腹に叩きつけた。

「グワァッ!!」

ルークは叫び声を上げながら数メートル吹っ飛ばされた。

「どう? なかなかのもんでしょ?」

Dキバは肩にドッガハンマーを担ぎながら地面を転がるルークに向かって言う。

だがルークはそんなDキバの言葉をあざ笑うかのように言う。

「確かになかなかの力だが、それでもこの程度なのだろう?」

「何?」

Dキバはルークの言葉にわずかに不快感を覚えた。

今のルークの言葉はいつでも自分を倒せるかのように言っているセリフだったからだ。

「そう言うあんただって私にやられてるじゃない? そんなあんたにその程度って言われても説得力ないわ」

「貴様は本当に俺が本気を出しているのか? だったらそれは平和ぼけしている証拠だな」

ルークはDキバからのダメージを全く感じさせないような動きで立

ち上がった。

そしてDキバが反応できないほどの速さでルークが近づいてきた。

「えっ!?!」

Dキバがルークのあまりの速さに驚愕していた。

そしてそんなDキバにルークは連続でパンチを放った。

「ぐっあああああっ!?!」

ルークの連続のパンチを食らったDキバは絶叫をあげて地面をのたうち回った。

「惨めだな。キバの後継者よ。そんなことでは幻想殺し（イマジンブレイカー）や禁書目録は守れぬぞ?」

ルークはDキバを踏みつけながら楽しそうに言う。

そしてルークはDキバを踏む力をどんどんあげていった。

「がっ…ああ…」

Dキバはいつの間にか通常時のキバに戻ってしまっていた。

そしてそんなキバにルークわ語りかける。

「今、幻想殺しは魔術師と戦っている。このままでは幻想殺しは死ぬかもな」

キバはルークからその言葉を聞いたとき力の鎖が弾け飛んだ。

「ガアアアアアアアアア！」

キバはルークの足を払いのけバランスを崩したルークに右に左にと蹴りを放っていった。

ルークはキバの蹴りを防ぐも何故か威力が高まっている蹴りを防ぎきれずダメージを負った。

「上条はどこ？」

キバはルークと一定の距離を保ったまま問いかける。

今のキバから発せられるオーラは獣のような荒々しさを秘めていた。

「もう一度聞いわ。上条はどこ？」

「さあな。だが俺に勝てたら教えてやるよ」

「だったら死なない程度にやってやるわ」

そう言ってキバは腰のホルダーから赤いフェッスルを取り出した。

そしてキバットに赤いフェッスルを装着した。

『wake up!』

キバットがそう叫ぶと左足の鎖が弾け飛びヘルズゲートが解放され

た。

「さあ終焉を奏でるわ」

キバがそう呟き空中に飛び上がり一回転した。

そして空中から一気に勢いをつけてルークに向かって振り落とした。

「ダークネス・ムーンブレイク！！」

キバはヘルズゲートを開いた左足でルークを蹴りつけた。

しかしルークもキバの蹴りを受け止めた。

だがルークが受け止めたキバの一撃は相当の威力だったのかコンクリートの地面が砕けルークの体が沈んでいく。

「オオオオオオオオオオ！！」

ルークは雄叫びをあげてキバを押し返そうとした。

だがキバの力はルークの力を上回りルークにキバの一撃が炸裂した。

「ガアアアアアアアア！？」

ルークは絶叫をあげて数メートル吹っ飛ばされた。

そして今度は確実に致命傷を与えることが出来た。

「はあはあ…」

キバは息を整えながら倒れているルークに向かって歩き出した。

「上条の居場所を教えなさい」

キバはルークを踏みつけながら問いかける。

「幻想殺しは今極東の魔術師と対峙している」

「極東の魔術師？」

キバが聞き慣れない言葉に疑問を抱いていた。

するとルークはキバの足を払いのけキバから距離を置いた。

「貴様とはいずれ決着をつける」

ルークはそう言ってキバから遠ざかっていった。

「待ちなさ…痛っ!？」

キバはルークを追いかけようとしたが戦いで受けたダメージがキバの足を止めてしまった。

そしてキバは変身を解き魅南の姿に戻った。

キバの鎧を纏っていたのにも関わらず切り傷や打撲が多数あった。

「痛ったいわね。て言うかあいつ結局上条の居場所いってないじゃない」

魅南は傷の具合を確かめながら愚痴をこぼしていた。



「だがあいつは確か極東の魔術師と戦ってるって言ってたぜ？」

キバットが魅南の隣を飛びながらルークの言った言葉を思い出していた。

「極東の魔術師ってあの不良神父の仲間じゃないの!？」

「まずいぞ魅南! あいつは右手しか通用しないぞ!？」

「なら早く見つけだすしかないわ!！」

魅南はキバットと共に上条を見つけだすために無人の道路を再び走り始めた。

だが一向に上条が見つかる気配はない。

それどころか近づいてる気配すらしないのは異常だった。

「どうなってんのよキバット!！」

「俺が知るかよ!！」

魅南とキバットは叫びあいながら無人の道路を走っている。

そんな二人の前に誰かが立ちふさがった。

その人物は頭の前から足の指先まで黒一色でまとめていた。

顔はフードをかぶっているためよく見えない。

「誰よあんた!!」

魅南は走るのをやめて謎の人物に話しかける。

「まあどうでもいいじゃん♪」

「何あんた？ 馴れ馴れしいわね。誰だって聞いてんのよ!!」

魅南は妙に馴れ馴れしい謎の人物に叫びかける。

「まあまああんまりかっかしい♪」

謎の人物はあくまでマイペースに魅南に話してくる。

魅南はこいつから何かを聞き出すのは無理だと判断して謎の人物の話を聞くことにした。

「で、あんたは私に何のようがあるわけ？」

「そうそう、幻想殺しのところに行くならこれを持って行きなよ♪」

そう言って謎の人物は魅南に札のようなものを差し出した。

魅南がそれを受け取り札を眺めた。

「これなんな…ってあれ？」

魅南がこの札について聞こうとしたがすでに謎の人物はいなくなっていた。

「何だったのかしら？」

魅南は謎の人物について考えながら上条のところに走り始めた。

つづく…

## 紅の鎧VS聖人

謎の人物から謎の札をもらった魅南は無人の道路をキバットと走っていた。

魅南の身体中にはルークとの戦いで受けた多数の傷があったが今は気にしている余裕はなかった。

一刻も早く上条を助けなければならなかったからだ。

「どこにいるのよあのバカは！！全然見つからないわ！！」

「まったくよおそんなかつかするな。カルシウム足りてねえぞ？」

「呑気にそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！！」

傷が痛むのか顔をしかめながら魅南はキバットに叫んでいる。

するとどこかで何かが崩れ落ちるのを見つけ出した。

「どうやらあそこみたいだぜ？」

「よし、急ぐわよ！！」

魅南は走る速さを上げて何かが崩れ落ちた場所に向かって走り出した。

そして数分後その近くに来たはずのだがまったく上条が見つからない。

「おかしいわ。確かにここら辺だったのに…」

魅南がそうつぶやいて周りを探していた。

するとどこからか女性の声が聞こえてきた。

魅南はその声のする方へ向かった。

そこにいたのはボロボロの上条とポニーテールの女性がいた。

その女性は二メートルほどの日本刀を持っていた。

上条はその女性の日本刀に捕まり立ち上がろうとしながら言っていた。

「インデックスのことなんか一瞬も考えてねえじゃねえか…」

魅南は二人に気づかれないように建物の影に隠れていた。

「てめえの臆病のツケをインデックスに押しつけてんじゃねえぞ！  
」

上条が言うのと女性の表情が怒りに満ちた表情になった。

そんな女性に上条は言葉を続ける。

「一年の記憶を失う怖かったら、次の一年にもっと幸せな記憶を与えてやれば、記憶を失うのが怖くないくらいの幸せが待ってるって分かってれば、もう誰も逃げ出す必要はねえんだから、たったそれ

だけの事じゃねえか、たったそれだけの事だろうが…」

魅南は上条の言葉に感心していた。

自分はあるな考え方は出来ない、と。

「てめえは力があるから仕方なく人を守ってんのかよ、違うだろ、そうじゃねえだろ！！守りたいものがあるから力を手に入れたんだろ！！」

魅南は上条の言葉に自分のことを言われてるような感じもした。

しかし上条は魅南の過去は知らない。

「てめえは何のために力をつけた、てめえはその手で誰をまもりたかった、だったらてめえはこんなところで何やってんだ…」

傷が痛むのか上条は苦しそうに言葉を続けている。

「それだけの力があって、これだけ万能の力を持ってるのに、なんで…なんでそんなに…無能…なん…だ…」

上条は女性にそう告げると気を失い日本刀につかまったまま倒れ込んだ。

そんな上条を見て魅南はついに建物の影から飛び出した。

「あなたも来たのですか？」

「そうよ。魔術師」

魅南は女性を睨みながら言い放つ。

「一応名乗っておきましょう。神裂火織です。この少年にも言いましたが魔法名は名乗らせないでください」

「そんなの知ったこっちゃないわ。あんたがインデックスちゃんを狙ってるのは知ってるのよ!!」

魅南は喧嘩腰になりながら神裂に向かって言い放つ。

すでに魅南はキバットをつかみ変身の準備をしていた。

「そうですか。なら話が早いです。彼女を渡してください」

「あんた私の答えわかってるくせに聞くの？」

そう言うとき魅南はキバットに自分の左手をかませた。

その瞬間魅南の体には不思議な模様が浮かび上がり腰にベルトが現れた。

「交渉決裂のようですね」

「当たり前よ!! 変身!!」

キバットを腰のベルトに装着してキバへと再び変身した。

そしてキバは神裂に向かって走り出した。

キバは神裂の手前まで行くと勢いを乗せた蹴りを放った。

しかし神裂はそれをさらりと避けて日本刀を鞘から抜きはなった。

「七閃…」

神裂がつぶやくとキバの体を強烈な衝撃が襲った。

「ガアッ…」

キバは体に衝撃を受けて地面を三回四回とバウンドして転がった。

そして受け身をとることも出来ずに背中から叩きつけられた。

「ガハッ…」

キバは叩きつけられた衝撃で肺から強制的に空気が押し出された。

「この七閃は一瞬と呼ばれる時間に七回殺すことが出来るほどの技です。その鎧がなければ今頃あなたは死んでいたでしょう」

神裂は日本刀を構えたままいまだに倒れているキバに言う。

そしてキバはゆっくりと立ち上がった。

「はあはあ…」

キバはすでに肩を上下させながら神裂を見据えている。

ルークとの戦いですでにキバの体力はほとんど残っていなかったの



だ。

「さっさとあの子を渡してください。私達はあの子に危害を与えるつもりはありません」

「ふざけんじゃないわよ…危害を与えるつもりはない？はっ笑わせるわ」

キバは神裂に向かって言い放った。

すると神裂の表情が変わった。

「あんたはインデックスちゃんを斬った奴でしょ？そんなゲス野郎の言葉なんか信じられるわけないわ！！」

キバはそう言って再び神裂に向かって走り出した。

だがその足取りは重く怪我の大きさを示しているようだった。

しかしそれでも神裂は手加減するような相手ではなかった。

「七閃！！」

神裂は再びキバに向かって斬激を放った。

だがキバは体を動かして神裂の斬激をかわしていった。

「何！？」

神裂はキバが七閃を避けたことに驚愕していた。

しかしキバはそんなことはお構いなしに蹴りを神裂に向かってはな  
った。

「はあっ!!」

神裂はキバの蹴りを日本刀を入れた鞘を縦にして構えて防いだ。

「そんなに驚いたの？ 自慢の一撃がかわされた事、が!!」

キバはがのところで軸足を変えてもう一度神裂に向かって蹴りを放  
った。

神裂は体勢を崩しながらもキバの蹴りをかわした。

さらに神裂はキバの軸足を蹴りつけてキバを背中から叩きつけよう  
とした。

「甘いわ魔術師!!」

キバはバック転の容量で背中から叩きつけられるのを回避した。

それだけでなく神裂の日本刀を持っている腕を蹴りつけて日本刀を  
吹っ飛ばした。

「私にあんた達にインデックスちゃんは渡さない!!」

「ではあなたはいいんですか!？ あの子が死んでしまっても!!」

キバは神裂の言葉に一瞬戸惑っていたがすぐに言葉を返した。

「死なせないわ。私が、いや私『達』が!!」

キバの言葉を聞いた神裂がこちらに聞こえてくるほど歯を食いしばっていた。

そして怒りのこもった声でキバに言い放った。

「あなたに何が出来るって言うんですか!!」

「そう言うあなただって何が出来るって言うの!! インデックスちゃんの記憶を消して、それが本当に最善だと思ってるの!!」

神裂はキバの叫びに言葉を詰まらせてしまった。

だがすぐに神裂はキバに言い放った。

「仕方がないではないですか!! それしかあの子が生きる術がないのだから!!」

神裂はそう叫びいきなりキバに向かって走り出した。

その途中で落とした日本刀を拾い上げキバに向かって抜きはなった。

「くっ!？」

キバは体勢を低くして神裂の斬撃を間一髪でかわした。

しかし神裂はかわしたキバに七閃を放った。

「うわっ!？」

キバは神裂の七閃を受けて鎧が火花を散らした。

そしてキバは数メートル吹っ飛ばされた。

「なんで…日本刀の動きは見ていたのに…」

キバは苦しそうにつぶやき立ち上がろうとした。

しかしそんなキバに神裂が追い討ちをかけた。

しかしキバは神裂の日本刀による一撃を跳躍してかわした。

「あなたには分からないんですよ。私達の気持ちなんか…」

神裂は泣きそうな顔になりながらキバに向かって叫ぶ。

だがそんな神裂の言葉をけなすようにキバは言い放つ。

「分からないわ、あんた達の気持ちなんて」

「何…ですって…」

キバはそう叫んでベルトの脇についているホルダーから青いフェッスルを取り出した。

そしてキバットにフェッスルを装着した。

『ガルルセイバー!!』

キバットが叫ぶとガルルセイバーが飛んできた。

キバはガルルセイバーを左手で掴みGキバにフォームチェンジした。

「私は諦めない、絶対に!!」

Gキバは体勢を低くして神裂に向かって走り出した。

そしてそのままガルルセイバーを神裂に向かって振り落とした。

神裂は日本刀でガルルセイバーの一撃を受け止めた。

ガキンツと言う金属音が鳴り響き火花が散った。

「諦めないのは構いません。ですが私達はあの子を保護します!!」

神裂叫びガルルセイバーを弾き返してGキバに蹴りを放った。

Gキバは獣のような身体能力で神裂の蹴りをかわした。

そして再び神裂に突っ込みガルルセイバーを振るった。

「やらせないって言ってるのよ!!」

Gキバは右に左にと神裂を揺さぶりながらガルルセイバーを振るう。

しかし神裂はガルルセイバーの剣筋を見切り次々とかわしていく。

「ならあなたにはここで消えてもらいます」

神裂はGキバの一瞬の隙をついてGキバの鎧を斬りつけた。

しかしGキバはガルルセイバーの刃でギリギリ神裂の一撃を受け止めていた。

そして神裂の一撃を弾き返して神裂を斬りつけた。

「くっ!？」

神裂の頬に刃がかすったがなんとか回避していた。

そして神裂は再び七閃をGキバに向かって放った。

「何回も食らわないわ!!」

Gキバはガルルセイバーの狼の口を七閃の進行方向に向けた。

そしてガルルセイバーから衝撃波が発生しては七閃による斬激を弾き返した。

「やっと分かったわ。あなたはワイヤーを使って攻撃していたのね」

「分かったからなんだと言うんですか？あなたに勝ち目はありません。なんせ私はまだ本気を出していませんから」

「奇遇ね私もまだ奥の手があるわ」

そう言った二人はしばらくにらみ合っていた。

そしてGキバの鎖が鳴ったとき二人は一斉に走り出した。

Gキバはガルルセイバーを神裂は日本刀を一気に振り抜いた。

二つの剣はお互いにぶつかり合い周りに衝撃波を与えた。

神裂は平気なようだったがGキバには大ダメージになった。

「ぐうう…くっ…」

Gキバは神裂の日本刀を押し返すように力を出しているが痛みによりもうほとんど力が出ないようだった。

そんな状態のGキバに気づき神裂はGキバの脇腹を蹴りつけた。

「ガアアアアッ!？」

Gキバは神裂の蹴りを受けて絶叫しながら地面を転がった。

そしてGキバは通常のキバの姿に戻ってしまった。

「さあこれであの子を渡す気になりましたか？」

神裂はキバに近づいてきて言った。

「何回：聞い：ても答えは同じ：よ」

キバは近づいてきている神裂に蹴りを放った。

しかし神裂は簡単にキバの蹴りをかわした。

「三日です。三日だけ猶予を与えましょう。その間に素敵な悪あが

きを」

そう言って立ち去ろうとする神裂を睨みつけながらキバは立ち上がった。

そして腰のベルトのホルダーから赤いフェッスルを取り出した。

「逃がさない!!」

そう叫んでキバはフェッスルをキバットに装着した。

『wake up!!』

キバットがそう叫ぶとキバの左足の鎖が弾け飛びヘルズゲートが展開された。

そして神裂に向かって走り出しそのまま跳び蹴りを放った。

「七閃…」

しかし神裂はそんなキバを七閃による斬撃で叩き落とした。

「ガアアアアッ!?!」

キバは七閃を食らい地面に叩きつけられさらにキバの変身が解けた。

「では素敵な悪あがきを…」

神裂は魅南にそう言い残すとその場を去っていった。



そして魅南は悔しさからか地面を思いっきり殴った。

「仕方ないわ…とりあえず上条をどこかに…」

魅南はそう呟きながら立ち上がろうとするがうまく力が入らなかった。

ふらふらになりながらも魅南は立ち上がり上条の元に向かった。

そして上条を担いで運ぼうとしたが力が入らずうまく運べなかった。

するとそこに誰かがやってきた。

「ど、どどどうしたんですかその怪我は！？紅ちゃん、上条ちゃん！？」

「先生…」

二人に声をかけてきたのは二人の担任の小萌先生だった。

「先生…上条を先生の家…」

「わ、分かったのです、紅ちゃんも無理しないでください！？」

「大丈夫ですよ…これくらい…」

そう言ってなんとか上条を小萌先生の家に連れて行った魅南だったが上条よりもけががひどかった。

「先生…あとは任せます…」

魅南は小萌先生にそう言って玄関で上条と共に倒れ込み意識を失った。

つづく…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0253m/>

---

とある魔術と紅の鎧

2010年10月11日03時00分発行